

おはようございます。この朝は、メッセージを取り次ぐ機会を与えて下さってありがとうございます。初めてお会いする方もいますので、簡単な自己紹介をもって始めたいと思います。私は、2006年から2011年まで、このJCCTの牧師としてご奉仕させていただきました。日本の神学校を卒業し、アメリカに渡って来て最初に牧会したのが、このJCCTです。26歳の時でした。

アメリカには単身で来ましたが、半年後に妻の訓子と結婚し、二年後には長男（大基）が与えられ、次男（基弥）もこのツーソンの地で生まれました。2011年の夏にLAに移ってから、さらに二人（三男の基歩と長女の実結）が与えられ、昨年末には、妻の母（礼子）も日本から移住してきましたので、今は7人家族で生活をしています。ちなみに、妻の母は、今イスラエル旅行中ですので、今回は来ることができませんでしたが、皆さんによろしくとのことでした。

今のクロスウェイ教会（サンファンンド）の牧師になって、はや五年が経ちましたが、今でもツーソンの地で学んだこと、経験したことは、私の宝となっています。ですから、こうしてまたこの地に戻って来ることができ、皆さんにお会いできることを心から喜んでいきます。限られた時間ですが、ともに主のみことばに聴き、主をあがめさせていただきましょう。

今日のテキストは、パウロが書いた最後の手紙といわれるもので、その中でも、最後の章（4章）を開いています。その6節のことばからもわかるように、パウロはこの時、自分が世を去るのが近いこと、つまり、自分の死が近いことを悟っていました。ですから、わが子のように愛し、これまで育ててきたテモテにあてて、この手紙を書き送ったのです。

7節を見て下さい。「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」。この「勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え」というのは、最後の部分の「信仰を守り通しました」にかかっていると思えます。つまり、パウロは、信仰の戦いを勇敢に戦い、神様が彼に与えられた道を信仰によって走り終えたというのです。

ここで皆さんにお聞きしますが、あなたは自分が世を去る時に、このパウロと同じように「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」と言えると思いますか？私が意味するところ、それはただ知的な面において「神の存在を信じている」とか「主イエスを信じている」というものではありません。もっと深い意味での主イエスとの個人的な関係、親密な関係を意味しています。信仰とは、言い変えるなら、信頼することです。あなたは、今日、主への信頼を最後まで守り通すことに励んでおられますか？

新約聖書27巻のうち、少なくとも13巻はパウロによって書かれたといわれます。また、それらの手紙の内容からわかるように、パウロという人は、主の他の弟子たちと比べても、より多くの働きをし、多くの実を結んだ人と言えるでしょう。それだけでなく、彼は多くの迫害を受け、何度も牢に入れられました。実は、この手紙もローマの獄中で書かれたようです。ある時なんかは、石で打たれ、死ぬ寸前まで行きました。

ですから、この世的にいうなら、パウロは自分の人生を誇ることもできた、自分自身の力に信頼を置くこともできたと思うのです。「主のために【私】はこんなことをした。また、あんなこともした」と。でも、そうではなく、彼は「私は（この）信仰を守り通しました」というのです。なぜでしょうか？なぜパウロは、自分の正しさや力、自分が成し遂げたことではなく、主への信仰を守り通したことを誇ったのでしょうか？

8節を見ると、その理由がわかります。「今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです」。

パウロは、「義の栄冠が、誰によって与えられる」と言っていますか？正しい審判者である主です。彼はここで、天国の望みについて語っていますが、表現としては、「義の栄冠」や「正しい審判者」という言葉を使っ

ています。それは、私たちを義（正しい）と認めるかどうか、つまり、天国に入るのにふさわしい者であるかどうかを決めるのは、私たち自身ではなく、主イエスだからです。私たちの歩みをご覧になり、ご自身の正しさをもってさばきを行われる主イエスが、私たちに義の栄冠を授けて下さる方です。

ですから、パウロは「今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです」というわけですが、彼のその確信は、実に主への信仰（信頼）から来ていました。一方では、彼は、自分が主に義と認められるのにふさわしくない罪ある者であることを知っていました。テモテ第一の手紙で「私は罪人のかしらだ」と彼自身が語っている通りです。

でも、もう一方では、そんな罪人を選び、ご自身のいのちを捨てるまでして愛して下さる方がおられることを知って、彼はその主に救いの望みを置いたのです。「主への信仰（信頼）を最後まで守り通した」と彼がいう理由はそこにあるのではないのでしょうか？そして、そのようにしてひたすら主を求めるパウロに、主もまた、みことばと御霊をもってご自身を豊かに現された。彼の主への信頼は、そのようにしていよいよ深められていったのです。

パウロは言います。「私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです」と。この「だれにでも授けてくださる」ということばは、私たちに希望を与えてくれます。ただ厄介なのは、そこに「主の現れを慕っている者には」ということばがあることです。「主の現れ」とは何のことですか？それは主の再臨です。皆さん、あなたは主の現れを慕っていますか？英語では、この慕うは、“love”という言葉が使われていますが、あなたは主の現れを愛していますか？つまり、主イエスを愛するゆえに、その日が待ち遠しい、待ち望んでいますか？

主イエスは、ご自分の現れを慕っている者には、だれにでも義の栄冠を与えて下さいます。主は、救いとしての天国を与えて下さるのです。でも問題は、すべてのことをご存知の主が、私たちの心を見られた時、果たして私たちのうちに、ご自分を慕う心を主が認めて下さるか、ということです。果たしてどれだけの人が、主が与えて下さる何か（お金、健康、物質、人間関係、その他何でも）ではなく、本当の意味で、主の現れを、主イエスご自身を愛しているのでしょうか？あなたはその人ですか？

主イエスは、ご自分の十字架の死を通して明らかにされた神の愛を、ただ感謝して受け取る人に、義の栄冠を与えて下さいます。神である方が、人のために、しかも罪人のためにいのちを捨てる、そんなあり得ないほど大きな愛に対して「私には何のお返しもできません」と言い、でも、そこまで自分を愛して下さる主を知ろうとし、主との個人的で親密な関係を求める人に、主は、パウロのように義の栄冠を受ける確信を与えて下さるのです。

ですから、パウロはここで自分を主語に置いて「私は信仰を守り通しました」といっていますが、実は、パウロの信仰を守られたのは、彼を選び、彼を愛し続け、彼がご自分を見続けることができるように支えられた主イエスご自身です。ご自分が救うと決められたパウロを、主が最後まで責任をもって導いて下さったのです。同じように、主は私たちの信仰も守り通させて下さいます。そのためにこそ、主は自ら十字架の苦難を受けて、私たちの罪に対する神のさばきを受けて下さったからです。

そして、そのように御心を行われた主イエスを、父なる神様は、死者の中からよみがえらされることで、すべてのものにまさる権威をこの方に与えられました。主を信じるすべての人が、罪と滅びから救われるため、神の子どもとされ、天の御国において永遠を主とともに生きるためです。ですから、この世にあっては戦いがあります。主に近づけば近づくほど、サタン攻撃も強まることでしょう。でも、主は、サタンよりも強いお方です。たとえ私たちは弱く、その信仰は小さくとも、主には私たちを立たせることがおできになります。このお方への信仰を、主イエスに対する信頼を私たちは最後までもたせていただくではありませんか。